東日本大震災とその後の子どもたちを

支えている人たちインタビュー

第 12 回（前編）

◎支えている人 ／ 話し手：渋沢やこ さん

神奈川県出身。社会福祉を学んだ後、2 年間世田谷区のプレーパーク（冒険遊び場）のプレーワーカーを務める。その後、劇団風の子にて演劇と「子どものいるとこどこへでも」の精神を学び、全国を巡演。退団後、2006 年より、布でつくった紙芝居「なにぬの屋」として野外や小さな会場での公演を続ける。2014 年に福島県郡山市に拠点を移し、「子ども」「遊び（演劇）」「地域」をキーワードにした事なら何でもライフワーク！と言い張り活動中。「あそび場つくり隊だんだん」代表。

ふたつの震災の話

東日本大震災の話の前に、阪神淡路大震災の話になりますが、当時私は世田谷区のプレーパーク（冒険あそび場）のプレーワーカーでした。東京は揺れがなかったので、プレーパークに来るこどもたちにとって事態はぴんとこなくて、2、3 日後には地震のニュースばっかりでつまんないって言い出したんです。プレーワーカーたちは、それでいいのか？という思いもあり、一週間経たないくらいで神戸市長田区へプレーワーカーを送ることになりました。プレーパークは住民の方々の支えがあって運営している形なので、住民が代わりにプレーパークを守り、プレーワーカーがふたり、第一陣は緊急支援として行きました。そして支援活動を通して、こどもにはやっぱりあそび場が必要だとなりました。今は、災害が起きたらこどもたちはどうしているのかなって真っ先に思いつくと思いますが、あの時はまだ、こどもがあそんでいるなんて何事？けしからんみたいな現場でした。本当にみんな初めての経験で、こどものあそび支援やこどもの PTSD について、まだ言われていない時だったんです。でも、第一陣はロープとかあそべるものを持って行って、避難場所の木から木へ滑車ロープをつけてダイナミックにあそび場をやったら、あそんだ後はよく眠れるようになりましたという声が聞かれたそうです。そこでちょっとずつ、あそんでもいい場所を作ったそうです。第一陣メンバーは、緊急支援は絶対に必要だけれども、こどもＳＯＳを出しているはずだって、支援に行く前から言っていました。私は第二陣で、震災から 2 週間後に初めて行きました。2 週間ずつ交代で行っていて、その後も行っているから、あわせて 1 カ月半く

らいいました。地震から 1 か月くらい経った頃は、こどもたちは地震ごっこや火事ごっこをしていました。長田区は広範囲で火事があったんです。野外のプレーパークならではのあそび場で、たき火もやっていたから表れた遊びだったのでしょう。
そういう経験があって、東日本大震災の時は現場のプレーワーカーが現場を空けて行くのはなかなか難しかったので、フリーな人材として私が宮城県気仙沼市に入りました。当時は東京に住んでいて、なにぬの屋とアルバイトをしていました。気仙沼へは、あそび場を作るという支援で入って、2011 年の 4 月 26 日から行きました。2 週間行って、3 日間東京に帰って、また行ってとか、1 か月東京にいて、また 10 日行ってとか、そんな形の支援でした。日本冒険遊び場づくり協会というところが中心になっていたあそび場支援だったので、2011 年の 9 月からは気仙沼に移り住んで常駐する人が決まったんです。なので、その 9 月以降は常駐している人のヘルプに行く形で、1 か月に 1 回、3、4 日行っていました。また、気仙沼で過ごしていたつながりから、南相馬の近藤さんがやっているみんな共和国（第 7 回参照）と知り合いました。活動自体は 2011 年に始まっていましたけど、私が知り合ったのは 2012 年で、公民館の室内で段ボールあそび場をされていたんです。外あそびはもちろん無理だったし、本当にどうしたもんかみたいに動いている中で、日本冒険遊び場づくり協会にも相談してもらったそうです。そこで、室内で段ボールをお行儀よく並べるだけじゃなくて、山のようにたくさん置いてダイナミックにあそぶと、室内でも、外あそびくらいの発散ができるかもしれないね、みたいなことになったそうです。みんな共和国の人たちは本当にすごいので、公民館の体育館に登れるくらいの段ボールを集めて、1 カ月くらい開催していました。毎日やっていたんじゃないかな。そのあそび場にも手伝いに行っていました。

ふたつの震災支援を経験して

阪神淡路の時は、こどもに対するボランティアへなにあそばせてんだとか、もうちょっと縮小しろとか、いろんな意見がありました。でもそれはおっしゃる通りなんです、生活の場で、一家庭ずつテントを当てられていくときだったので、ちょっとでも場所が必要だったんですね。仮設住宅の建設に向けて資材を置くからって、あそび場はどんどん縮小させられる時もありました。みんな本当に混乱していたので、宿題するからこの一角だけ空けてとか、おもちゃの支援物資が来たから置き場所作って、という風にだんだんとこどもたちのための場ができてきたけど、それが必要なんだとか、心のケアみたいな概念はたぶんなかったと思います。それが東日本大震災ではこどもたちが心配ですってみなさんおしゃっていて。地元気仙沼の方に「こどものことをやってくれてありがとうな」って言われた時は、そんなことを言ってもらえるなんて、という感じでした。中越地震もあったので、避難所のような極限の状態の時でもこどもはあそぶ場所が必要なんだということが、少しずつ広がってきたのかもしれないです。特に津波っていうのもあったと思います。こどもの心のケアっていう言葉が出ていたように、こどもたちの心がわさわさしていることを心配していらっしゃる人が多かったです。もちろん、おうちがなくなったり家族のだれかが亡くなったりという子が

心配、っていうのもあるけども、全体的に、こどものことをやってくれる事は大事なことだって言ってもらえていたから、そこがすごく違ったなと思っています。

災害のあとのあそびについて

気仙沼のあそび場では、しばらくすると津波ごっこというあそびが出てきました。阪神淡路の地震ごっこの時のように、自分で抱えきれない、処理しきれないものがあるけれど、最初は黙っているんです。だんだん、こんな経験があってこわかったとか、言葉で表現できる子や大人は、うち大変だったのよとか話せるようになりますよね。段階があると思いますが。だけど特に言葉では何ともしがたい子は、小学校低学年から、5年生、6年生くらいまでかな。最初はこわくてそこに触れられたくないって時期があって、1か月後くらいになると、あれはなんだったんだろうという段階にくるってことですよね。揺れる木の上に乗った時に、お、地震だ！って、感覚的に思い出して、おお、地震だ地震だ地震だ、震度5、6だ！うわ～倒れるぞ～！とか、それは当時のことが客観視できる時期にきたともいえる、と聞いていました。大人がそこに率先して一緒にやることはないと思うんですけど、かといって、腫れ物に触る感じで接するのも、その子が客観視している最中なので違うのかなと。それは見守ろう、というのは、阪神淡路の時もやりながら学んだことでした。東日本の時も、対処としては同じでした。ただ、周りにこわがる子、まだその段階にない子がいたらその場から離すことは必要だなと思ってやっていました。例えば、地震の「じ」って聞いてもこわい、津波の「つ」って聞いてもこわい、という子もいました。また、水を見る、水が自分のほうへ流れてくるのが怖い子もいました。なので、流した水で、津波だ津波だ～とあそんでいる子と、それを見ちゃうとこわいという子は離してあそぶようにしていました。特に、津波ごっこと呼んでいたのは、すべり台の下からかけあがって、すべり台の上にいる子の足をひっぱってひきずり落とすというあそびでした。大人が聞いたらやめてほしい、どきどきしちゃいますよね。津波役の子がすべり台の下から、わーっと駆けあがって、上にいた子をひきずりおろすんです。私は大人が加わるものではないなって思ったので、少し離れたところから見ていました。それをおもしろがってやれているか、発散としてやれているかなっていうのはしっかり見守って、そうじゃない子は、こっちで唄でも唄おうか、としていました。時期もあったし、1回1回きちんと見ることですね。前の経験がこうだったからとか、文献ではこうだからとか、そういうのはなかったと思います。基本、あそび場にいると、こどものあそびにびっくりします。そうくる？みたいなのがあるので、地震ごっことかは本当にびっくりすることだったけど。でも、まず観察、こどもに鍛えられていくみたいな感覚です。こどもが越えてくるので。マニュアルなんて作らせてもらえないですね。

こどもに関わる道を目指すまで

私は、大学は特別支援学校教諭の免許を取れる大学を選びました。元々小さい頃に、障害を持っている子も一緒に劇を観た、とか、何か催しがある時に障害を持っている人たちのグル

ープと自分の母親の車に一緒に乗って送り迎えをしたとか、そういう関わりの記憶がありました。そういった記憶もあったからか、障害を持っている子だけが通う学校じゃなくて、地域でごちゃごちゃっとしているところで関わりたいと思っていましたが、プレーパークとの出会いは本当にたまたまでした。世田谷にある劇団に見学に行って、バイトも探しているんですという話をしていたら、近くの羽根木プレーパークっていうところでプレーワーカー募集してるよ、と言われたので行ってみました。そしたら、公園の一角が無法地帯みたいな感じで。なんだこれ？と思いましたね。30 年くらい前の当時のプレーワーカーは、すごく個性的な人たちで、プレーパークは魅力的な場所でした。一歩入るとちょっとごちゃごちゃで、いろんな人が来ていて。障害を持っている人が来ているとか、実際にプレーパークで働き始めたら当たり前にあったんですけど、障害のあるなし関係なく、場所自体が「だれでも来ていいよ」としてある。こりゃいいなと思いましたよね。プレーパークには、就職として入って、2 年間やって、阪神淡路がありました。でも、その後は演劇の道に進みました。体がふたつあったらどっちもやりたかったです。今思えば、演劇の道に入った動機も一緒かもしれないです。なにぬの屋という紙芝居屋さんは、チケット買ってみんな見に来てっていうんじゃなくて、みんなの遊んでいるところに私が行く、その場に居合わせちゃった人が一緒に見ちゃう、といった雰囲気です。布を使った紙芝居なので、海の場面で布をふわーっと客席にかけたりするのは、支援学校の教育実習の時に、ストレッチャーにいる肢体不自由の子も知的障害の子もいる学校だったことが影響していると思います。そういう子の刺激になる演出をごちゃごちゃと取り入れています。色々な人がこの地域にいるよねっていう、そういう空間を作りたかったんだと思うんです。だから、たぶん一緒なんです、紙芝居屋さんを生業にしているけど、プレーパークは自分の基礎になる活動に出会ったって感じです。

福島へ移り住む

私は演劇の道に入ってから、地域の子どもの遊びや社会状況をずっと見続けている仲間がいるのに、自分は離れてしまった、申し訳なかったなっていう想いもありました。そんな中で東日本大震災があり、東京じゃないところに移り住む事になってもいいなと、ぱっと思ったことがありました。原発事故が起こって、外であそぶとか自然に触れる、土に触れることができない状況に日本全体がそうなったって思う人もいれば、ある地域だけだと思う人もいて、様々だったとは思います。みなさんもショックだったと思うけど、私も、こどもからあそぶ場所や自然を奪ってしまった、と思いました。地震や津波は自然災害ではあるけれど、原発のことをずっとたどって考えていくと、その仕組みに賛成した、電気を使っていた、とかいろんな経緯から大人の責任だと思って、移り住むとしたら福島だなと思いました。ただ、もう一点考えていたことは、大人がこどもの場所とか時間とかいろんなことを奪っているという状態は、それはもう全国どこでも同じじゃないのかということでした。だとしたら、やることはどこに行っても同じだという思いもありました。2012 年くらいには福島に移り住むぞと思い始めましたが、自分の中で迷いがあり、すこしふらふらとしていました。郡山

に暮らすことになったのは、たまたまです。知り合いはほとんどいなくて、一回なにぬの屋で呼んでくださった方を知っているくらいでした。私としては、何かの団体に所属してそこで与えられたことをやるっていうイメージよりも、自立したひとりの人として住んで、何ができるかな、と迷っていたのです。当時、今もですけど、自分の演劇の仕事と地域の活動を両立する、そういう視点でいくといいんじゃないかと思って、最終的にはぴょこって来ちゃったっていう形ですね。そうやって福島に来たのが 2014 年です。

近所のこどもたちとの交流

福島で暮らし始めて最初の一年は、なんだかこそこそしていました。住宅街のアパートに住んでいて、車は品川ナンバーだったのをすぐに郡山ナンバーに変えたけど、東京から来てるって見られていると思っていました。私も人見知りなのか、活動がしたいなら、有名な団体とかの門をたたけばいいのに、暮らしていくうちに自然と何かつながっていくだろうと思い過ごしている日々でした。でもそうしていたら、夏のある日、近所の子どもたちが私の家の前にめちゃくちゃ集まっているんですよ。その時ポケモンＧｏが流行ってたから、何かいるんだ！と思ったのですが、ポケモンの生きものじゃなくて、本当の猫がいたんです。捨てられていたみたいで、こどもたちで飼おうとしていました。プレーワーカーの性なのか声をかけたら、こどもたちはかくかくしかじか、わーっと話し始めたので、ちゃんと話し合いをしました。そして結局、連れて行かれちゃうかもしれないけどいいねってこどもたちが納得したところで、私が保健所に連絡しました。そしたら、保健所には、簡単には捨てられないんです、こどもたちが何人かで飼おうとしていたなら、全員の親御さんの承諾を取って来てくださいと言われました。飼う努力をしたけどどうしても、とか、とても迷惑だから、とか、そういうことじゃないと引き取れないと。そりゃそうだなと思って、そこからこどもたちに、私の家に上がっていいよとして、里親募集しますのポスターを描いたり、貼りに行ったり。小学生から中学生、10 人くらいで、たまに喧嘩しながらやりました。それから猫友って呼ばれるようになって、その後には名前（やこ）で呼ばれるようになりました。でも、結局は保健所じゃなく管理会社のところに連絡が入って、そちらで引き取る人を探すからということで、猫騒動がおわりました。しかしその後も、みんな変わらず私の家に来るようになって。家の大きな窓のそばに椅子を置いて縁側のようにして、近所のおばあちゃんとかが来たら腰掛けられたらいいな、そんな生活もいいなって思っていたから、希望通りといえばそうなんですけど。学校帰りに一旦家にランドセル置いて、のどかわいたーとか言いながらやって来ます。なので、事務仕事をしたい時は仕方なく、近くのカフェとかに行っています。学校の帰り道に私の家の前を通って、車があると、あ、いるんだー！って走ってくるんです、全力で。それを考えると、居留守を使うのも断るのも私はできないなと思って。なにぬの屋の保育園の公演は午前中だから、こどもたちの帰りの時間に都合がいい感じでいるんです。でもさすがに、旅公演や出張公演もあるので、いない日が続いたりしたら、今度はいる日を書いておいてくれって言われて。何日はいるよって、こどもたちが見えるところに書いてい

て、それを続けて早５年くらいです。小学生だった子が中学生になるんで、中学生だと夜にふらっと来て確認してるみたいで。中学生はスマホで音楽聞くだけで帰る…別に私と遊んだりしないで帰りますね。

てづくりようちえん あおぞら

郡山で暮らし始めてからも、気仙沼や南相馬、仙台で何かあったら行っていました。その中でも、仙台にある西公園プレーパークの仲間から、自主保育をやりたいんだと相談されました。私が世田谷のプレーパークにいた時も、自主保育とすごくつながりがありました。園舎がない保育をするわけだから、プレーパークみたいに自然や素材みたいなものであそびこめるようなところで活動したいですもんね。だから自主保育とプレーパークってすごく縁があるものだったんだけど、その自主保育（てづくりようちえんあおぞら）は、立ち上がった時、親がふたりだけでした。自主保育は預け合いだから、自分の親が当番じゃない日と、当番の日がある。でもふたりだからけっこう行き詰まるというのがあって、私が月３回、保育者として仙台に行きました。その時の体験は私にとってもすごくよかったです。私が保育者の時はふたりともお母さんはいなくて、仙台の街を、曲がり角で木の枝が倒れたほうに向かって歩いて、本当にどこまでも歩いていったりとか、どこまでも歩いていくと思いきや、たぶん大人の足だったら 10 分か 15 分で行ける美術館に、3 時間かけて行ったりとか。あと広瀬川の河原にも行きました。今思い出しても、学びにならない日はなかったです。この自主保育は、「町のようちえん」でした。だから森のようちえんも園によって様々だと思うんですけど、通じるものがあるというか、とても親近感があります。

後編へ続く